

# グレーム・グリーンについての一考察

—コンラッドとの類似点と相違点—

植 木 利 彦

岡山理科大学教養部

(昭和62年9月30日 受理)

## 序

ケネス・アロットとミリアム・フォリスの共著、*The Art of Graham Greene*において彼等は、グリーン作品に“The most important positive influence to be detected are those of Stevenson and Conrad”と述べている。<sup>1)</sup> 実際、グリーン初期の作品、*The Man Within*を読むとき、最も強く感じることは、この作品がコンラッドの多くの作品、とりわけ *Lord Jim* と非常に似ているということである。主人公の職業、苦境から脱出するための比喩的な意味での standing jump、裁判の場面、帽子の象徴的な使用法といった幾つもの類似点が見られる。しかし、最も重要な類似点は、両作家の作品の多くに見られる二面性を備えた主人公の原型とも言えるアンドルーズとジムの性格のそれであると考えられる。

この小論では、主としてアンドルーズとジムの性格を手掛かりに、コンラッドとグリーンとの類似点、及び相違点を明らかにしてみたい。

### 1) double self

アンドルーズは、密輸仲間を収税吏に売り、その結果として、今は収税吏に逮捕されずに逃亡した仲間を追われている身である。彼は、仲間から復讐を受けるという恐怖—強迫観念—に取り付かれた男なのである (I am a hunted man pursued by worse than death)。しかしながら、アンドルーズの恐怖という obsession は、仲間を裏切った時点から生じたものではなく、実は、彼には幼い頃から家庭で彼や母親に絶えず暴力を振り続けた父親に対する恐怖感があったのである。父親の暴力はアンドルーズにとっては単なる恐怖、憎悪すべきものであるのみならず、人間的環境の地獄を象徴するものであった。従って、この父親によって子供の頃、彼に叩き込まれた恐怖という obsession は、その後のアンドルーズの人生において決定的な影響力を持つようになっている。こうし

た子供の頃の環境が生涯その人の社会を見る目を決定することはグリーンが強く主張するところである。

I was an inhabitant of both countries :... How can life on a border be other than restless? You are pulled by different ties of hate and love. For hate is quite as powerful a tie : it demands allegiance. In the land of the skyscrapers, of stone stairs and cracked bells ringing early, one was aware of fear and hate, a kind of lawlessness - appalling cruelties could be practiced without a second thought ; one met for the first time characters, adult and adolescent, who bore about them the genuine quality of evil . . . . Hell lay about them in their infancy.<sup>2)</sup>

A child, after all, knows most of the game (*i.e.* life) — it is only an attitude to it that he lacks. He is quite well aware of cowardice, shame, deception, disappointment.<sup>3)</sup>

このような子供時代の強迫観念に取り付かれた者としては、*Brighton Rock* のピンクイーが、また、神に対する背信行為という強迫観念に取り付かれた者としては *The Heart of the Matter* のスコウビーがいる。

コンラッドの作品の主人公では、パトナ号から jump したという事実によって、真の自我が明らかになったにもかかわらず、夢想した勇敢で英雄的な虚像が彼自身そのものであるという強迫観念に取り付かれ、命を賭して虚像と実像を同一のものにした頑固なまでに単純な *Lord Jim* のジムがいる。更に彼の同類には *Nostromo* の主人公ノストローモがいる。

*Nostromo* にとって人生の価値は、Holroyd, Sotillo, Montero 達にとって経済的価値が最大のものであるように、社会の人間から彼に与えられる賞賛の言葉の中に、そして社会の人々の彼に与える尊敬に満ちた態度の中に見出されるのである.... 彼のこうした態度は、その意識の対象こそ異なっているが、Jim が dream を、ego ideal を実現するために燃やしたあの狂気の情熱と一致するものである....<sup>4)</sup>

また、*Victory* のヘイストは、*Nostromo* のデクーと同じく、人間的絆を持つことは墮落への一步であると硬く信じ、常に人生の傍観者の立場 (look on and never make a sound) に留まろうとする強迫観念に取り付かれているのである。

... , this observer of facts seemed to have no connection with earthly affairs and passions. The very courtesy of his manner, the flavour of playfulness in the voice set him apart. He was like a feather floating lightly in the work-a-day atmosphere with things he attracted attention...<sup>5)</sup>

このようにコンラッドやグリーンの小説には、ある種の強迫観念に取り付かれた主人公が度々見られるのである。彼等が抱く強迫観念は、彼等の想像力や理性或いは置かれた環境によって後天的に身に付けたものであり、ここに彼等の真の自我（real self）と other self の二面性（double self）が生じてくる。

コンラッドは、真の自我（real self）とは野蛮性を秘めた始原生に根差したものであり、real self に支配されることは「“Heart of Darkness”においてクルツが経験した人間性の闇の世界への垂直的降下に外ならない。」<sup>6)</sup>と考えていた。コンラッドは、「アフリカのコンゴ河遡行の経験によって、人間の心の内にある闇の世界の恐ろしい力を目の当たりに見たし、闇の世界は決して過去の中に葬り去られたものではなく、仮眠の状態のままでも我々の心の中に存在し、将来も存在し続けるであろうことを、そしていつ何時でも目覚めて輝かしい観念自我を破壊する力を秘めている」<sup>7)</sup>ことを知っていたのである。そして我々の文明社会も元をただせば、この野蛮な世界に生きた人間が発展させ、築き上げた世界に過ぎない。我々の文明社会も現在の秩序や規律を失えば、あの野蛮な世界に逆戻りする可能性を充分秘めているのである。従って、彼は、始原生に根差した real self の猛威を押さえるのは社会の倫理観、道徳観、あるいは個人の義務感や責任感に支えられた観念自我であるとする。

..., with some misgivings, suggested that the seafaring order to which he (i.e. Conrad) paid tribute in *The Nigger*, *Lord Jim*, and “Youth” approximated a communal ideal,... As a result more importance attaches,... to the claims of the individual divided between the opposing forces of a rigid official code of morality and law and a world ruled by chance. When subjected to accident and the drive of instinct man must err,...<sup>8)</sup>

すなわちコンラッドは、性悪説的な考え方に立ち、我々が人間として後悔することなく生きるためには観念自我（ego ideal）に固執することが必要であり、観念自我こそ real self に優るものとする。

グリーンは、人間は生まれたときは恐怖心も憎悪も狡猾さも虚栄心も欲望も持たぬ純粹な善、すなわち「無垢」であるが、悪の蔓延る環境の中で生きているうちに次第に悪に毒され、その悪によって誘惑されて生きるべき道を誤るとする性善説的な考え方に立つ。

It is in childhood that innocence is betrayed and the seeds of future corruption sown. The child lives in an evil world, ‘the world of moral chaos, lies, brutality, complete inhumanity’. The fate of so many of Green’s protagonists is directly traceable to the traumatic experiences of their childhood.<sup>9)</sup>

グリーンは、コンラッドのように自我を始原生に根差した real self と観念的な other self とに分けるのではなく、善に基づく self を高貴な自我（upper self）とし、悪に毒された後天的な self の部分を下劣な自我（lower self）とする。それ故、彼は、我々が悪に毒された環境の中であって、悪の誘惑に打ち勝ち、本来の善に基づく自我を維持して生きることを強調する。

コンラッドとグリーンでは人間性の捕らえ方が全く正反対であるかもしれないが、いずれにせよ、両作家にとって何らかの形で double self を持つ我々、人間は「如何に生きるべきか」が主要なテーマになっている。

## 2) How to live

ジムは、船乗りとしての義務、責任を果たし得なかったため、社会に対して罪の意識を、自分に対して恥辱を感じている。そんな船乗りとして失格者であるジムに対して、マーローは何故強い関心を抱いたのか？ それはジムが自分のなした行為の責任を執ろうと裁判を受けたことが、彼が我々の一人（one of us）であったことを証明したからに外ならない。ジムが他の船員の様に卑劣な行為を恥じることもなく、罰を逃れるために逃亡すれば、問題はなかったのである。何故ならば悪人は、元来、社会のはみだし者であり、社会の規律や秩序を守るとは期待されていないので、社会の正統な構成員とは考えられない。従って、社会の構成員でない彼等のなす悪行は、社会にとって不幸なことであっても、一過性のものであって、決して社会秩序や規律にとって脅威となるものではない。しかし、one of us は明らかに社会の正統な構成員であり、社会秩序と規律を守らなくてはならない存在なのである。我々の住む社会は、人間同士の信頼関係の上に辛うじて存在しているのである。しかし社会の中には我々を墮落させ、社会の秩序や規律を破らせる誘惑や恐怖、すなわち悪が満ち溢れているのである。更に我々の心のなかにも始原生に根差した自我があり、観念自我の壁を破って我々を破滅へ導く闇の力が潜在しているのである。

'Yes! Very funny this terrible thing is. A man that is born falls into a dream like a man who falls into the sea. If he tries to climb out into the air as inexperienced people endeavour to do, he drowns — *nicht war?*... No! I tell you! The way is to the destructive element submit yourself, and with the exertions of your hands and feet in the water make the deep, deep sea keep you up....<sup>10)</sup>

我々は、そのような“destructive element”の中に生まれ落ちるように運命づけられている。その中で、我々は人間同士の信頼関係、あるいは社会秩序と規律を守るための最大限の努力を求められているのである。何故なら社会の中での信頼関係の崩壊は、社

会の無秩序をもたらし、ひいては人間存在の基盤を危うくするのである。従って我々は、何はともあれ、社会の信頼関係を維持し、守らなくてはならない義務がある。

Conrad, judging by his villains, seems to have been oppressed by a sense of evil, and evil to him meant an irresponsible force wandering at large in an ordered and respectable society. There is nothing to be done with it at all. It is a perpetual menace, and the only armour against it is a perfect integrity on the part of every member within the gates.<sup>11)</sup>

one of us は、グリーンという人間的次元の「正」に根差した存在でなくてはならない。その社会を構成する最小単位である個人の社会秩序と規律そして道徳への裏切りは、たとえ無意識的な行為であっても、社会の信頼関係を崩壊させる脅威となる。社会の崩壊は無秩序に繋がる危険性を孕むものである。それ故、マーローは、我々の心のなかにも、我々の一人であるジムのような行動に出、社会の秩序や規律を脅かす恐怖心、衝動があることを憂慮し、無意識の内に恐怖心や衝動に影響され、自分の意志とは逆の行動に出る可能性を持つ我々が如何に生きるべきかをジムを見守ることによって再認識しようとしたのである。マーローはジムの置かれた状況に同情はしているが、決してジムの行動を是認している訳ではない。彼の疑問に対する答えは、人間は、置かれた環境（その環境が時として人間にとっての恐怖や憎悪を伴うものであっても）の中で、人間の崇高な理念を信じ、信頼関係に応えるように努力することが屈辱感も後悔も生まない人生を歩む道であると考えているフランス海軍士官によって与えられている。彼は沈みかけのパトナ号に乗り移り、30時間の間頑張りとおし、アデンまで曳航されるパトナ号を指揮していたのである。この勇敢な士官は、ジムの話をマーローから聞き、次のように述べている。

‘That is so,’ he resumed, placidly. ‘Man is born a coward (*L’homme est né poltron*). It is a difficult — *parbleu!* It would be too easy otherwise. But habit — habit — necessity — do you see? — the eye of others — voilà. One put up with it . . . .’

‘Allow me . . . I contended that one may get on knowing very well that one’s courage does not come of itself (*ne vient pas tout seul*). There’s nothing much in that to get upset about. One truth the more ought not to make life impossible . . . But the honour — the honour, monsieur! . . . The honour . . . that is real — that is! And what life may be worth when’ . . . ‘when the honour is gone — *ah ça! par exemple* — I can offer no opinion. I can offer no opinion — because — monsieur — I know nothing of it.’<sup>12)</sup>

面目が失われて、人生に何の価値があるか？ このフランス士官の言葉は、コンラッドが絶えず我々に語りかける彼の人生哲学なのである。コンラッドにとって個人の存在基

盤は社会に対する責任感、義務感すなわち個人の道徳的・倫理的理念にある。

社会の倫理観、秩序、規律に背くことは社会に対する背信行為であるが、社会はその行為をグリーンのいう人間的次元である社会的、道徳的規範に則した「正」・「邪」によって判断し、罰を下す。罪は、社会的には、ある形式によって償われるものであるが、個人の人間性に対する、いうならば、良心に対する裏切りはどうなるのか？ グリーンにとってはこの点に最も強い関心がある。グリーンは良心に対する裏切りを宗教的次元の「善」・「悪」の観点から「人間的行為の形而上学的な根底につながるモラル」すなわち「人間の根元悪」としてとらえている。<sup>13)</sup> 従って、ジムの行為をグリーンの観点から見れば、人間的次元での「邪」であるのみならず、明らかに「悪」に根差した行為といえる。何故ならグリーンという「善」とは、常に宗教的な意味合を持ち、個人の勝手な想像を許さない絶対的なものである。ジムのように勝手な夢を描くのは、明らかに「悪」に毒されているからなのである。*The Man Within* の登場人物でジムに最も似ている人物はカーリオンである。カーリオンの存在基盤は、彼のロマンティックな夢と、その夢を叶えてくれる船なのである。従って、船を失うことは彼のロマンティックな世界を失うことになり、それは時間の問題となる。何故なら彼の存在基盤は、その依拠するところがグリーンという宗教的な「善」ではなく、空虚の夢と常に消滅する可能性のある物質的な物にあったからに外ならない。このような自分勝手な夢を想像し、真実を認識できない者は、当然、実生活において敗北者となることは明白である。夢は明らかに人間の進むべき道を誤らせ、破滅へ導く悪の誘惑なのである。このことはカーリオンとエリザベスの対比によって示されている。

The two musics had fought for final mastery - one (*i.e.* Carlyon) alluring, unreal, touched with a thin romance and poetry, the other (*i.e.* Elizabeth) clear-cut, ringing sane, a voice carved out of white marble. One had gone out from him into a vague world, the other was silent in death, but silence had conquered.<sup>14)</sup>

世俗的な夢に取り付かれたジムもカーリオンも現実に夢を砕かれて破滅の道を進んでいった。一方、エリザベスが世俗的な悪に染まった環境の中であって、尚且つ墮落しなかったのは、彼女は宗教的な儀式には疎いが、聖書の熟読によって、最終的には総ての人間的行為に対して神の裁きがあることを信じる「善」に根差した生き方を身に付けていたからである。彼女にとってはこの世での人間的次元で判断される正・邪、名誉、延いてはそれらから生じる死や恥辱も問題ではなく、最後の審判の折りの神の救いが彼女の思考と行動の絶対的基準となっているのである。このことは結婚の約束をしたエリザベスにアンドルーズが男女の関係を迫った時、彼の要求を拒む彼女の言葉に表れている。

'You don't understand. It's not what you call respectability. It's belief

in God. I can't alter that for you. I'd leave you first.'

....'But all the same, I'll do what I think is right.'<sup>15)</sup>

グリーンの場合、良心の裏切りは基本的に「善」なる状態にある人間の「善」を侵す人間悪に基づくものであり、悪の侵入を許すことは神への冒瀆となる。何故なら「善」は神と共にある。従ってその人間悪からの開放は神への信頼という宗教的な意味合いを持つものとなってくる。<sup>16)</sup>

グリーンは、人間は、本来、善（innocence）であるが、人間が生きていかななくてはならないこの世がすでに悪に染まっているとする。従って善なる者が悪の世界で生きていく以上、必然的に悪の影響を受けざるを得ないことになる。このグリーンの世界を青木雄造氏は次のように記述している。

スコラ哲学の存在論では悪をもって存在を持たぬものとしている。その説によれば、在るものはすべてその存在の階程に応じて、ある限りにおいて善であり、悪とは在るべき存在の欠除、迫奪、喪失であるという（この場合まだ道徳的な意味を持たない）。つまり悪は存在ではない。しかし悪が存在でないということは、悪が実在せず、現実的なものでないという意味ではない。悪は存在の毀損として、傷として実在しているのである。もちろん、この悪は存在的なメタフィジックな悪にすぎないが、それは人格としての人間の実在の中では道徳的（罪）として意識され、創造主と被創造物との間の愛の関係において原罪として把握されるものにつながる。一般に「行為の悪」が生じ得る根拠は「存在悪」の中にあるのである。そしてグリーンの小説人物を読む際に重要なことは次の点である。もし事物は存在する限りにおいて善であり、有すべき存在を喪失した場合に、そこに悪が生ずるものなら、悪は善の中に寄生して実在するわけである。従って存在を持たぬ悪は善を通じて作用するのである。反対に善は常に悪の侵入を受け、悪に転化する危険性をはらんでいる。<sup>17)</sup>

悪は善が存在して初めて存在の可能性を持つものであれば、善と悪は遊離して存在するものではなくなる。つまり悪が存在する世界は善あるいは神が存在することを認識させる世界でもある。従って、神が存在するのであれば、最後の審判の日に神の救いを頼りとして「発見された善に自分を賭けて、あくまで悪に抵抗すること、それがグリーンの小説のヒーローたちの態度であり、それはまさしくヒロイックな生き方であるが、それが成功するか、しないかは問わない。自分の選んだこの任務に全力をつくすことが、悪のつくりなす混乱に秩序を与える唯一の道である。」<sup>18)</sup>

### 3) A view of the world

グリーンは13才の時にこの世は地獄であると認識したが、それは寄宿舎での経験を通してであった。感受性の強い思春期の彼は多分に観念的にこの世を pessimistic な世界

として捉え、その影響が後年まで続いているが、コンラッドは、彼の父、アポロのポーランド独立運動（1863）の失敗の結果として、両親と共にロシアへの流刑を経験した。また大叔父の屋敷が革命運動中に暴徒となった大叔父の小作人たちによって襲撃され、象牙の十字架以外、家具、調度品は何一つとして原型を留めるものはなかったようなことも経験している。<sup>19)</sup> 更に両親には幼くして死別し、16才で母国を離れ、生涯、異国で船乗りとして、作家として生活した。コンラッドも彼自身の経験からグリーンと同じように人間社会を悪の蔓延る世界として捉えている。

We all have our instants of clairvoyance. They are not very helpful. The character of the scheme does not permit that or anything else to be helpful. Properly speaking its character, judged by the standards established by its victims, is infamous. It excuses every violence of protest and at the same time never fails to crush it, just as it crushes the blindest assent. The so-called wickedness must be, like the so-called virtue, its own reward — to be anything at all . . . .<sup>20)</sup>

しかしながらコンラッドにとっては、現実の社会が如何なるものであれ、異国で生きていく以上、彼の置かれた環境の中で任務、責任、義務を果たすことが社会の信用を得る絶対必要条件であった。

文筆生活を始めたころのコンラッドは、意志の力と、あらゆる素材や体験を小説の土台とする能力しか持ち合わせていなかった。にもかかわらず、かれが優れていたのは、ジョージ・エリオットと同様に意志の力を道徳的理念にまで高めたからである。この道徳的理念を、かれは生涯に渡ってあらゆる角度から眺めた。その結果、かれはこの道徳理念の世界こそ、真に実在する世界と信ずるに至った。自分が余所者であるという考えから、生涯、抜け出すことのできなかったコンラッドは、この道徳的理念の世界において、自分の才能をのばす場所はないと考えた。そして、この理念から離れたら、不安に陥り自身を失うという事実を素直に認めた。<sup>21)</sup>

従ってコンラッドにとっては、道徳的理念は個人の存在基盤そのものであり、道徳的理念への裏切りは、社会への裏切りである以上に個人の存在基盤そのものの喪失に繋がる（All a man can betray is his conscience）。存在基盤を持たぬ個人は、魂を持たぬ肉体と同じで、自ら生きる権利を放棄したに等しいのである。良心を裏切った者はもう one of us とはいえない人間になり、社会から排除されるべき人間となるのである。つまり社会的には死者となるのである。

それでは個人の存在基盤の喪失を恐れて、隠者の如く生きることは可能であろうかという疑問に対して、コンラッドは、*Victory* において社会からあまりにも見事な超越的な

生活を送ったために、自己主張の習慣を失い、危機に際し、適切に対処しえなかったヘイストの口を通して次のように語らしめている。

“Ah, Davidson, woe to the man whose heart has not learned while young to hope, to love — and to put its trust in life!”<sup>22)</sup>

すなわち、人間はこの世で生きている限り、シュタインの言う destructive element に満ち溢れた現実のなかに身を浸し、自分の良心を裏切らないように最善の努力をする以外に生きる道はない。しかし時として、コンラッドのいう美德、あるいは律義な禁欲主義的態度も *Victory* のジョーンズや *Lord Jim* のブラウンのような圧倒的な悪の意識と直面するとき、我々は、彼のいう美德がどれ程の人間の救いになるのか疑問を抱かざるを得ないのである。ヘイストもジムもそうした圧倒的な悪との対決の中で破滅していったのである。つまり、コンラッドの道徳的理念に支えられた世界の下に我々は我々を飲み込もうと大きく口を開いている虚無の世界（グリーンのいう人間悪の世界）を垣間見るのである。

He does believe intensely, as a matter of concrete experience, in the kind of human achievement represented by the Merchant Service — tradition, discipline and moral ideal; but he has also strong sense, not only of the frailty, but of the absurdity or unreality, in relation to the surrounding and underlying gulfs, of such achievement, ...<sup>23)</sup>

「未来にも現在にも、則ち天の最後の審判の座席にも、世俗的な崇拜者に囲まれることにも、慰安を見出し得なかった」<sup>24)</sup> コンラッドは、どうしても本質的にこの人間社会を無秩序で、虚無な世界としか認識することができず、その世界に何とか秩序と規律を付与するには、人間の道徳的理念に頼る以外に道はなかったのである。

グリーンは、コンラッドの作品を読み、コンラッドの描く社会の根底に渦巻くものが彼の幼児期に経験した恐怖と憎悪に満ちた悪の世界であることを理解したであろう。コンラッドは、民族的な動乱、流刑といった苛酷な環境の中で幼児期を過ごしたので、グリーンがいうように幼児期の経験がその人間の生涯に強い影響を与えるならば、コンラッドが、社会を虚無的に捉えるのは無理からぬことである。コンラッドの作品の根底には確かに虚無主義がどっかりと位置している。そして虚無主義が暴れ狂うのを辛うじて禁欲的な保守主義が押え込んでいるのである。

グリーンもこの人間社会を悪の蔓延る地獄と捉えているが、彼の作品全体を覆っている雰囲気は seedy, homely, shabby, sinister といった言葉によって比喻される pessimistic な世界であって、コンラッドの nihilistic な世界ではない。

Various readers have remarked on *The Secret Agent's* anticipation of

Graham Greene, on the Dostoevskian character on *Under Western Eyes*.  
But Greene is not Dostoevsky.<sup>25)</sup>

この差は彼等二人の幼児期における残酷さ、愚劣さ、卑劣さの苛烈な経験の差によるものかもしれないが、その差を生みだした要因の一つが宗教的感覚であったことは確かである。グリーン作品では、道徳的理念の喪失がそのままコンラッドのいう虚無の世界—グリーンという人間悪、墮地獄—に繋がって、そこからの脱出が不可能となるのではなく、宗教による救いが用意されている。例えば、ジムもアンドルーズも自殺的行為によってその命を断ったが、ジムが理想的自我の成就に命を賭けたことに、実際、満足したかどうかは疑問の残るところである。一方、アンドルーズは自己の内にある邪悪な自我を殺すことによって、エリザベスと同じ「善」に基づく自我の確立を果たし満足のうちに死についたのである。つまり同じ死を迎えるにあたって、ジムは理想的な自我の成就のために強いられた死であったが、アンドルーズの死は自ら望んだ神の意志に沿った「善」に基づく自我となるための死であった。

この両作家の世界観の相違は、コンラッドが個人の行為をグリーンという人間的次元でのみ見たためであり、彼の世界では、「正」と「善」、「邪」と「悪」はほぼ同一視され、厳密な区別はないが、これはアーヴィング・ハウのいうようにコンラッド自身に宗教心がなかったためであろう。一方、グリーンは、人間の行為を「正」・「邪」の人間的次元と、「善」・「悪」の宗教的次元の両方から見ている。しかし、グリーンが、人間的次元に重きを置いていないことは *The Man Within* の裁判の場における陪審員の決定や、*The End of the Affair* のセアラの不義に見られるとうりである。彼にとって人間的次元の「正」・「邪」は社会が定めた人為的な基準に過ぎず、それは人間の拠り所とはならず、我々は、常に絶対的真理である宗教的次元の「善」・「悪」を基準として判断、行動しなくてはならないとする。その結果が恐怖や死を招こうともそれは神の救いによって癒されるべきものとなる。何故から「救いは神の恩寵と人間の努力の協力によって完成され、そのとき人の罪は拭いさられて消滅する」からなのである。<sup>26)</sup> 彼は、神の存在が見出し得るにもかかわらず、神の存在を認識しようとはせず、悪に染まり、悪戦苦闘する人間に憐れみを感じているが、人間に救いの道が残されている故に決して絶望はしていないのである。この点がコンラッドとグリーンの違いの大きな点といえるであろう。

### 結語

グリーンは、コンラッドと同じように人間の二面性に強い関心を示しているが、グリーンの世界においてはコンラッドのいう道徳的・倫理的理念は人為的なものである故にコンラッドの世界程絶対視されるものではない。何故なら「正」・「邪」は、社会が社会

の秩序や規律を維持するために作り出したものであり、社会制度や時代、あるいは社会状況によって「正」・「邪」の道徳的・倫理的理念は変化するものである。それは、相対的な理念であって、グリーンはそれに絶対的な信頼をおくことができなかつたのである。グリーンの世界では、人間的次元の「正」・「邪」よりも、「悪」が存在するかぎり、絶対に存在する「善」、すなわち神を拠り所とする宗教的理念に人間の思考と行動の絶対的基準を置いている。従って、グリーンとコンラッドは人間を捉える視点は同じであっても、一方が人間を倫理的に、他方は宗教的に捉えているため、自ずと社会の捉え方も異なり、人間の「生き方」についても独時の世界を展開しているといえる。

## Notes,

- 1) Kenneth Allott and Miriam Farris, *The Art of Graham Greene* (New York: Russell & Russell. 1963) p.36
- 2) Graham Greene, *The Lawless Roads* (London: William Heinemann & The Bodley Head. 1978) p.2
- 3) Graham Greene, *Collected Essays* (London: The Bodley Head. 1969) p.16
- 4) 植木利彦, A study of Joseph Conrad — *Nostromo* — 岡山理科大学紀要第4号 1968. p. 59
- 5) Joseph Conrad, *Victory* (London: J. M. Dent and Sons LTD. 1967) p.60
- 6) 植木利彦, A study of Joseph Conrad — “Heart of Darkness” — 岡山理科大学紀要第6号 1970. p.10
- 7) 植木利彦, コンラッドの「内なる旅」について, 「英米文学」Vol.XV I I I, No1 関西学院大学 1973. p.41
- 8) Paul L. Wiley, *Conrad's Measure of Man* (New York: Gordian Press, Inc. 1966) p.91
- 9) J. P. Kulshrestha, *Graham Greene: The Novelist* (New Delhi: Macmillan India Limited. 1977) p.7
- 10) Joseph Conrad, *Lord Jim* (J. M. Dent and Sons LTD. 1961) p.214
- 11) Edward Crankshaw, *Joseph Conrad* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd. 1976) p.25
- 12) Joseph Conrad, *Lord Jim* p.147
- 13) 小池 滋, 高松雄一, 野島秀勝, 前川祐一編, 『青木雄造著作集』(南雲堂, 1986) pp.160-161
- 14) Graham Greene, *The Man Within* (London: Willam Heinemann & The Bodley Head. 1976) p.225
- 15) *Ibid.*, p.203
- 16) 1935年にリビアに赴いた折りに生きる喜びを知った後は、「生」にたいしてより積極的な宗教的な意味を、生きることにより積極的な社会的責任を付与するようになったが、それ以前においては *The Man Within* のアンドルーズや, *The Heart of the Matter* のスコウビーに見られるように、生きることは墮落することであり、自殺することが墮落から救われる唯一の道であるような悲

観的な人生観を抱いていたようである。そのことをグリーンは、*Journey Without Maps* (London: Willam Heinemann & The Bodley Head. 1978)の中で次のように述べている。

I had made a discovery during the night which interested me. I had discovered in myself a passionate interest in living. I had always assumed before, as a matter of course, that death was desirable. ( p.251)

- 17) 小池 滋, 高松雄一, 野島秀勝, 前川祐一編, 『青木雄造著作集』 pp.155-156
- 18) *Ibid.*, p.174
- 19) Joseph Conrad, *A Personal Record* (London: J. M. Dent and Sons LTD. 1968) Absolutely the only one solitary thing which they left whole was a small ivory crucifix, which remained hanging on the wall in the wrecked bedroom above a wild heap of rags, broken mahogany and splintered boards which had been Mr. Nicholas B.'s bedstead. (p.62)
- 20) Joseph Conrad, *Victory* p.219
- 21) Fredrick R. Karl, *A Reader's Guide to Joseph Conrad*, The Nonday Press, 1960.  
野口啓祐, 野口勝子共訳 『ジョウゼフ・コンラッド』—暗黒の形而上学をたずねて—(北星堂書店 1974) p.16
- 22) Joseph Conrad, *Victory*, p.410
- 23) F. R. Leavis, *The Great Tradition* (London: Chatto & Windus. 1973) p.200
- 24) Irving Howe, *Conrad: Order and Anarchy (Politics and the Novel, 1954)*  
鈴木建三訳, 「コンラッド, 秩序とアナーキー」(筑摩書房 1967) p.542  
この翻訳は筑摩書房の世界文学大系の中に入っている『コンラッド』のなかに含まれている。
- 25) Albert J. Guerard, *Conrad the Novelist* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. 1965) p.221
- 26) 小池 滋, 高松雄一, 野島秀勝, 前川祐一編, 『青木雄造著作集』 pp.150-151

## A Study of Graham Greene

— On the similarity and the difference between  
the literary world of Conrad and that of Greene —

Toshihiko UEKI

*Faculty of Liberal Arts and Science,*

*Okayama University of Science*

*Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan*

(Received September 30, 1987)

In *The Art of Graham Greene* written by Kenneth Allot and Miriam Farris, they describe that not in the latter novels but in the early ones of Greene, “the most important influence to be detected are those of Stevenson and Conrad”.

On reading *The Man Within* printed for the first time in Green’s novels, we detect several similarities — the occupation of the protagonists, the metaphorical “standing jump” to get out of a predicament, the court scene and the symbolic usage of a hat and so on — between *The Man Within* and Conrad’s *Lord Jim*. But the most important similarity is the double self which the protagonists of both novels have in common.

In this paper, analyzing the quality of their double selves, we try to find out the similarity and the difference between the literary world of Conrad and that of Greene.